

“The Bear” における フォークナーの「場」の感覚

平 田 博 士

I

フォークナー (William Faulkner) は、一地方、一地域である南部に人間の歴史と個性を介在させ、南部人を支えるものを「南部人は多分それ以前から個人の名誉とか自尊心という感覚の発達を極度に重要視していた⁽¹⁾。」と捉えていたのである。フォークナーの描いた架空の郡 (The Yoknapatawpha County) においても、この南部の感覚「名誉と自尊心」が大農園の秩序を維持し、守っていた。しかし、黒人奴隷制度を生み、南北戦争を引き起こしたのである。この秩序が崩れ去ると、南部人の心に「敗北と荒廃の中であって、その感覚 (名誉と自尊心) だけが人生の生甲斐⁽²⁾」として残されたのである。

フォークナーは、この感覚を南部特有のものとはみずに、アメリカ大陸の発展過程において、人間が「荒野」、「大森林」と関わることによって持った勝利と敗北の感覚とみたのである。ターナーが、「辺境はその外端部—野蕃と文明の接点⁽³⁾」であると考えていたように、アメリカ大陸は絶えずフ

注(1) ジェフリー・ゴラー著、星新蔵・志賀謙共訳『アメリカ人の性格』、(北星堂書店、昭和51年1月30日)、p. 268.

(2) 前掲同書、p. 268.

(3) フレデリック・J・ターナー著、松本政治・嶋忠正訳『アメリカ史における辺境』、(北星堂、昭和53年7月23日)、p. 7.

ロンティアを拡張し、前進しながらフロンティアを消滅させてきたのである。このフロンティアの消滅は、人間に勝利と敗北を味わわせ、同時に不安と恐怖を心に植え付けたのである。このように人間の受けた過去の体験は、心から消えることなく想念となって恐ろしいまでに人間の中に侵入し、奥深く心の中に刻み込まれたのである。荒野、大森林の開拓によるフロンティアの消滅という文明化は、アメリカ大陸の歴史的問題と白人、黒人そしてインディアンという人種的問題をも生んだのである。

このような問題をフォークナーは、アメリカ大陸の文明化過程を「熊」(“The Bear”)において問い、この大森林の開拓に関わった人間の精神的発達を文明化と捉えているのである。大森林における祖先の行為である「過去」が、年代性、時間性となって作品の背後で蠢めき、現在の作中人物のあたかも体験であるかのように表にでてきているのである。この「過去」が、強い強迫観念となって、閉ざされている心の中に押し入ってきている。

これらから逃れようとする『八月の光』(*Light in August*, 1932)の白人か、黒人か解らないジョーク・リスマス(Joe Christmas)の血の呪い、『響きと怒り』(*The Sound and the Fury*, 1929)の南部の頹廢(コンプソン家)と「時」の想念の破壊力による意識の混乱に落ちいるクエンティーン(Quentine)の意識の流れ、そして『行け、モーゼ』(*Go Down, Moses, and Other Stories*, 1945)に至るまでどの作品にも背後に「過去」を背負うことが、運命である人物を描いているのである。

『行け、モーゼ』の中の「熊」(“The Bear”, 1942)における大森林は、フォークナーにとって、というよりアメリカ人にとって精神的故郷なのである。ヨーロッパから移民として入植し、開拓した荒野、大森林は、アメリカ人の生活の場でもある、と同時に歴史を構成した場でもある。そこは自からの存在の意味を明確に確認させ、アメリカ人としての自覚を持

てた場でもある。このように「熊」における「荒野」，「大森林」はフォークナーと同様にアメリカ人にとって精神的故郷である。

以上述べてきたことを「熊」における「大森林」とアイザック・マッキヤースリン (Isaac McCaslin) を中心にして，フォークナーの「場」の感覚を作品を通して探ってみる。

Ⅱ

クレヴクール (St. John de Crèvecoeur) は「また辺境では，人々は生まれた気質とあまり当てにならない勤労心のままに行動しているが，その勤労心は少しく道德上の掟の力でもってしっかりしたものにしないと衰えてしまうことが往々にしてある⁽⁴⁾。」と荒野の無制限な自由のなかで，アメリカ人は互いの共通点を道德心として生きてきたと述べる。

「熊」における主人公アイクが，熊と出会いは，

Then he relinquished completely to it. It was the watch and the compass. He was still tainted. He removed the linked chain of the one and the looped thong of the other from his overalls and hung them on a bush and leaned the stick beside them and entered it.⁽⁵⁾

のように自然と合体することである。アイクが自然と合体するということは，自からその自然の中に身を委ねることである。「熊」に示されている自然とは，どんな記録文にも記録されていない太古以来の大森林 ('It was

(4) St. John de Crèvecoeur, "What is an American," *Letters from an American Farmer*, 1782. 邦訳，アメリカ学会訳編「アメリカ人とは何か」『原典アメリカ史』第1巻 (岩波書店，1979)，p. 342.

(5) William Faulkner, "The Bear," *The Portable Faulkner*, edited by Malcolm Cowley (New York: Viking Press, 1967), p. 213. 論文中の原文は，全て上記のテキストから引用いたしました。

of the wilderness, the big woods, bigger and older than any recorded document.’⁽⁶⁾）なのである。そこで暮らすためには、大森林の共通の鎖に結ばれねばならない。その共通の鎖とは

His cousin McCaslin brought him for the first time to the camp, the big woods, to earn for himself from the wilderness the name and state of hunter provided he in his turn were humble and enduring enough⁽⁷⁾

と謙虚さ、忍耐、勇気である。この精神を持つことによって大森林の自然に受け入れられるのである。

この精神は生きていく過程で自然に体験し、獲得するものである。大森林の自然の脅威の中で生存するためには、人間の本能で真の勇気の意味を体得し理解することである。このように大森林に受け入れられるために、人間は大森林での体験から必要条件を修得するのである。この精神の獲得過程は、「過去」の記憶として「現在」に連続している。このようにして、人間は自然を克服し、自然への従属を脱したのである。

すなわち、人間が文明化する過程において体験し、修得したこの精神と自然の中に身を委ねる精神とは同一なのである。第一章の「大森林」とアイクの状況は、アイクが「大森林」に一步を踏み入れるための必要な条件を体得するまでの体験から構成されている。十一月と翌年六月の狩猟に参加する許可がおり、「大森林」に受け入れられるまでのアイクの体験は、まず

He did not move, holding the useless gun which he knew now he would never fire at it, now or ever, tasting in his saliva that taint of brass which he had smelled in the huddled dogs when he peered

(6) *Ibid.*, p. 197.

(7) *Ibid.*, p. 198.

under the kitchen.⁽⁸⁾

と、台所の縁の下にちぢこまっている犬を覗き込んだ時に嗅いだ同じ匂を嗅ぐのである。

アイクが自然に近づくことによって

Because he recognized now what he had smelled in the huddled dogs and tasted in his own saliva, recognized fear as a boy,...⁽⁹⁾

と匂いとは、恐怖であると理解しはじめるのである。それは自然の中に身を委ねることを許され、大森林の中に入るための共通の認識を深めたことによるものである。翌年の六月、アイクが、11歳になった年、再び狩猟一行と大森林での生活をはじめると、彼は一人で森の中をさまよいながら「真鍮のような味」と「恐怖心」が入り混って感覚だけでは受け入れられないことを理解する。アイクの最後の手段は、サム (Sam Fathers) の助言と訓練を試みて

Though they were being shaped out of thin air just one constant pace short of where he would lose them forever and be lost forever himself, tireless, eager, without doubt or dread, panting a little above the strong rapid little hammer of his heart, emerging suddenly into a little glade, and the wilderness coalesced.⁽¹⁰⁾

と簡単に受け入れられたのである。

サムの教えは「鉄砲こそ汚れている」ということであった。翌朝、鉄砲を残して大森林の中に入っていく、と汚れているのは鉄砲だけではなく

Then he relinquished completely to it (the markless wilderness).

It was the watch and the compass. He was still tainted. He re-

(8) *Ibid.*, p. 207.

(9) *Ibid.*, p. 208.

(10) *Ibid.*, pp. 212-213.

moved the linked chain of the one and looped thong of the other from his overalls and hung them on a bush and leaned the stick beside them and entered it.⁽¹¹⁾

と「時計」，「磁石」も汚れていることを理解するのである。そして文明化に伴なって入ってきたものすべてを放棄するのである。このように，アイクが荒野に身を委かせ，一体となることについて，大橋健三郎氏は「この永遠性，霊性が，サム・ファーズズの感得する「荒野」の霊性・永遠性と一体になって「熊」の段階における彼の思想と行動を支えてゆくのだ⁽¹²⁾。」と指摘している。

アイクは，太古以来の掟に従って大森林に入る，と同時に人間の「知恵」，「忍耐」，「勇気」そして「謙虚」という荒野の共通の絆である道徳心を精神的特質として学び，生きるための基本とするのである。この精神の発達過程を通ることによって，アイクの荒野での修業は，終っただけではなく，動物としての本能を基本的に理解できる人間に成長したのである。これは人類が，荒野を切り開いて文明化しようと進めた第一歩である。荒野に入るためには，荒野の掟と精神を理解し，自然の支配する力に順応することによって受け入れられる。自然の力を人間のものとするには，人間としての確信と精神的発展過程を通して感情を基本的に理解する必要がある。

アイクが，荒野と一体になるためには美德を体得する必要があった。それは集約された想像の世界から飛び出して，現実的な狩猟に参加することである。それはあくまでも，純粋な感覚的連想の世界から体験的認識の世界への飛躍である。荒野の底知れぬ力に対する恐怖心を，自からの体験と

(11) *Ibid.*, p. 212.

(12) 大橋健三郎著，「「荒野」の力による価値の転移と持続—「熊」」『フォークナー研究』第3巻，（南雲堂，1982年7月30日），p. 56.

知恵と順応性で克服し、荒野で生きる方法を見い出すのである。人間として存在するための意味を理解するためには、心の中にある原始性への回帰である。これこそ自然の中に受け入れられる必須条件である。

サム・ファーズによる一つの儀式

He had killed his buck and Sam Fathers had marked his face with the hot blood, and in the next November he killed a bear. But before that accolade he had become as competent in the woods as many grown men with the same experience. By now he was a better woodsman than most grown men with more.⁽¹³⁾

と荒野に入るための元服の儀式と理解するのである。この儀式と共にアイクの精神的発達の様子は

Then he realized that the fyce was actually not going to stop. He flung the gun down and ran. When he overtook and grasped the shrill, frantically pinwheeling little dog, it seemed to him that he was directly under the bear...It was quite familiar, until he remembered: this was the way he had used to dream about it.⁽¹⁴⁾

と大きな信念となってきたのである。他に対する謙虚さ、ものに対する忍耐を越えて無言の愛情へと変化するのである。だが、アイクは精神の内に何ものかの終りを感じとって、謙譲さの内に森の本当の姿を自から見てとるのである。荒野に住む大森林の人間として値うちのある人間へと成長するのである。アイクは、精神的に成長し、ものを感じとる心を持つ最も好ましい人間としてフォークナーは描くのである。

(13) Willam Faulkner, *Ibid.*, p. 213.

(14) *Ibid.*, p. 215.

Ⅲ

それでは、ここで視点を変えて「熊」における「大森林」，「荒野」の「場」について考えてみる。アイクを受け入れ，成長させた「場」である大森林の主は，老いた「大熊」である。この「大熊」には，汚れはなく，朽ちはてることもなく，一つの名前，一つの明確な呼称を独力でかちえていたのである。罨，落とし穴は通じることもなく，猟銃やライフル銃までも効めがなく

... and through which ran not even a mortal beast but an anachronism indomitable and invincible out of an old, dead time, a phantom, epitome and apotheosis of the old, wild life which the little puny humans swarmed and hacked at in a fury of abhorrence and fear, like pygmies about the ankles of a drowsing elephant;—the old bear, solitary, indomitable, and alone; widowed, childless, and absolved of mortality—old Priam reft of his old wife and outlived all his sons.⁽¹⁵⁾

とあるように「死滅した大昔から出現した不屈不撓の時代錯誤」と「古の^{いにしえ}野性の生活の一つのまぼろし，一つの縮図，そして一つの神格」という象徴 (Symbol) として描かれているのである。単なる熊ではなく，「大森林」の王者として名前，オールド・ベン (Old Ben) と呼ばれ，伝説化と神格化し猛しい不滅性を誇っているのである。オールド・ベンは，神話的，永続的普遍性を身に付け，まるで機関車のように荒野を走りぬけ，自然の具現者となっている。

フォークナーは，「熊」の象徴するものについて「消えゆく荒野」 (One

(15) *Ibid.*, p. 199.

symbol was the bear represented the vanishing wilderness.⁽¹⁶⁾) と述べる。

そして象徴については、

The deliberate use of symbols is a dangerous literary device, since the author may let himself be distracted from the primary reality of his characters and situations in his effort to give them secondary or symbolic meanings. I felt that truly effective symbols, like those in Faulkner's novels, were produced almost unconsciously, when the author was so deeply absorbed in his story that he made it larger than life.⁽¹⁷⁾

と「実物大よりも巨大化」して「無意識」に作り出され、書き進めているうちに象徴化してきたのであると説明している。

「熊」にもどって「大森林」の象徴であるオールド・ベンの住む「荒野」は

... that doomed wilderness whose edges were being constantly and pumily gnawed at by men with plows and axes who feared it because it was wilderness.⁽¹⁸⁾

と、人間と関わることで、少しずつ破壊に向って進んでいるのである。そしてオールド・ベンも

— a corridor of wrehage and destruction beginning back before the boy was born, through which sped, not fast but rather with the

(16) Frederick L. Gwynn and Joseph L. Blotner, eds, *Faulkner in the University* (New York : Vintage Books, 1959), p. 280.

(17) Malcolm Cowley, *The Faulkner-Cowley File* (London : Chatto & Windus, 1966), p. 19. フォークナーとカウリーによる書簡集。カウリーの手紙での質問にフォークナーが、作品を書いた理由、作品上に表われた疑問に細かく、そして素直に答えている。

(18) *Ibid.*, p. 199.

ruthless and irresistible deliberation of a locomotive, the shaggy tremendous shape.⁽¹⁹⁾

と、単なる熊ではなく、少しづつ人間の手によって浸蝕され、歴史を刻み付けている「大森林」と常に関わっている。何物をも寄せ付けることのないオールド・ベン「老熊」にとっては、「どんな記録文」よりも古い荒野であることによってのみ生きて行けるのである。だが、荒野が「大森林」という象徴ではなくなる、とオールド・ベンも単なる動物として、仔豚や仔牛を殺し、納屋を破壊するのである。

象徴化している「老熊」は荒野に住む人々にとって、殺すこともなく毎年の楽しみとしての儀式であるランデブーの相手 (To him, they were going not to hunt bear, and deer but to keep yearly rendezvous with bear.⁽²⁰⁾) として扱われている。

このように荒野とオールド・ベンの関係は、一方に現実を持ち、そしてもう一方に「大森林」と「老熊」という幻想的象徴となっているのである。幻想は「記憶を絶した太古の森林」, 「古の野性の生活のまぼろし, 一つの縮図, そして一つの神格」なのである。これに対して現実には「鋤と斧をもった人間にほんのちょっぴりずつ緑を噛みくだかされている。」, 「仔豚を殺し, 仔牛を殺す」である。このように幻想として象徴化した世界と開拓されている現実の世界が示されている。

「大森林」は滅びる運命を持った荒野であるために、この荒野に住む「老熊」も必然的に熊になり死の運命を背負うことになるのである。そこには「大森林」と「老熊」という運命共同体としての死を感じる。自然の体現者であるオールド・ベンの運命こそ旧南部の運命であると感じる。それは旧南部の社会の崩壊の前兆を予告しているようである。

(19) *Ibid.*, p. 199.

(20) *Loc. cit.*,

オールド・ベンの死の予言は、ド・スペイン少佐 (Major de Spain) の「大森林」の掟を破った (I'm disappointed in him. He has broken the rules.⁽²¹⁾) と話すことによって、単なる動物の熊として扱われることではじまる。そこで、死の準備のための幕が、切って落とされたのである。まず、サム・ファーズが、犬の準備 (Whether we got the dog yet that can bay and hold him until a man gets there with a gun.⁽²²⁾), といっではじまる。サムは、一匹の犬 (Lion) を見つけ、二週間というもの馴らすための壮絶な訓練をするのである。ライオンは「巨大な犬、不撓不屈の精神そのものとも言うべき犬」であった。フォークナーは、ライオンについて馴らすことすら不可能で、何かの自然の力と強い個性を超絶した「不撓不屈の精神」 (He was a complete individualist.⁽²³⁾) と説明するように、犬というより野性の動物である。「大森林」, 「老熊」と同様に野性の「犬」という象徴である。

アイクは、ライオンを憎しみ、恐れて、

Yet he did not. It seemed to him that there was a fatality in it.

It seemed to him that something, he didn't know what, was beginning; had already begun.⁽²⁴⁾

と何かが起きると感じ取る。このライオンからアイクは、愛すべき荒野の「老熊」 (オールド・ベン) の死を予知するのである。フォークナーは、この滅びゆく運命を持つ「大森林」と「老熊」にアイクを委ね、彼の人間的成長と精神的力強さを巧みに作品中に描いているのである。

(21) *Ibid.*, p. 2.

(22) *Ibid.*, p. 203.

(23) Gwynn & Blotner, *Ibid.*, p. 59.

(24) William Faulkner, *Ibid.*, p. 228.

IV

アイクは、南部に存在している不動の掟に従って生きることこそ精神的成長の第一歩であると理解する。それは「大森林」，「老熊」という象徴を見いだすことによって，荒野の中に自分の存在理由を発見し，支えるものは美德であることに気がつく。

アイクが感じ取ったように，オールド・ベンの死の準備が整えられ最後の追跡がはじまる。「老熊」の死に加担するのは，ブーン (Boon) とライオンである。オールド・ベンが川に追いたてられ，最後の死の瞬間が訪れるのである。それは「大森林」の象徴としての「老熊」に相応しい最後であった。「老熊」の死によるアイクの精神は，一つの成長過程を終えるのである。「老熊」の死の状況は，

This time the bear didn't strike him down. It caught the dog in both arms, almost loverlike, and they both went down. He was off the mule now. He drew back both hammers of the gun but he could see nothing but moiling spotted houndbodies until the bear surged up again. Then Boon was running. The boy saw gleam of the blade in his hand and watched him leap among the hounds, hurdling them, kicking them aside as he ran, and fling himself astride the bear as he had hurled himself onto the mule, his legs locked around the bear's belly, his left arm under the bear's throast where Lion clung, and the glint of the knife as it rose and fell.⁽²⁵⁾

と激烈な死闘を繰り返した後，嵩高とも思える死の儀式がおこなわれた。オールド・ベンを死に追いやったブーンとライオンは，どちらも直接荒野の文明化に関係はない。だが，どちらも荒野の住人であって，荒野への侵

(25) *Ibid.*, pp. 240-241.

入者ではない。文明化の象徴である銃でオールド・ベンは倒されたのではなく、ナイフの一撃とライオンの一噛で倒されたのである。

オールド・ベンが倒れると次の日、ライオンが死に、一日たってサム・ファーズも急死する、とマッキャスリン (McCasline) とド・スペイン少佐が、馬車を飛ばしてキャンプ地に行く。サムは、切りとったばかりの若枝の四本の柱に縛りつけて作った壇に乗せられ、インディアン式の埋葬が行なわれていた。荒野が荒野でなくなることによって荒野に住み、住人であるものは傷付き死ぬ、そしてすべての者が消え去るのである。

フォークナーは、荒野に住むことは追求することであると考えている。しかし追求が止まるとそれは死に向って

Most of anyone's life is pursuit of something. That is, the only alternative to life is immobility, which is death.⁽²⁶⁾

と自からの手で幕を閉じるのである。それは自尊心にとんだもので、他人を一切閉め出そうとするものである。生きるために心に決めた不動の掟が破られると、そこには破壊と死が待ち受けているのである。単純で、原始的に生きていたものにとって、無情で野卑な現代の物質主義的文明化へ移行することは、そこに住むあらゆるものを破壊することになるのである。

荒野に寄生虫的に存在している侵入者が、自から決めた倫理的進歩「銃架に掛けた獲物の角や毛皮」と「毎年の熊とのランデブーというゲーム的狩猟」を主張し始めると、荒野は固定化し、象徴化して「過去」の記憶の中に入ってしまうのである。しかしながら、アイクにとって、荒野は、単なる大森林ではなく、精神の成長の「場」である。荒野に住むものすべてが、心の成長のための訓練の「場」、体験し体得する「場」でもあった。

アイクにとって「大森林」，「老熊」そして「サム・ファーズ」は

(26) Gwynn & Blotner, *Ibid.*, p. 271.

If Sam Fathers had been his mentor and the backyard rabbits and squirrels his kindergarten, then the wilderness the old bear ran was his college and the old male bear itself, so long unwifed and childless as to have become its own ungendered progenitor, was his alma mater.⁽²⁷⁾

と心の拠り所で、唯一つの修練の「場」である。アイクが成長するためには、なくてはならない「場」である「大森林」の中には謙虚さ、忍耐そして勇気というすべてが凝縮されているのである。この「大森林」の消滅による緊張は、アイクの心に質的变化をもたらしたのである。また、「老熊」の死も、アイクに鋭い幻覚を生み出す瞬間となったのである。あのリアルな死の場面は、「大森林」の消滅という緊張感となったのである。16歳の時、アイクは家系の秘密の記されている農園台帳を発見すると、この緊張は鋭く歴史性を帯びてくるのである。

オールド・ベンの死に会い、同時に師であるサム・ファザーズの死に立ち会い、18歳になった時に荒野を訪れてみる、とブーンが木に群がるリスを自分のものだとか狂気なまでに主張しているのに出会う。そして「老熊」の倒れた「大森林」は、急速に開発され、製材会社の伐採によって木材工場が入り、鉄道が奥深くまで敷かれて文明化が進んでいるのである。21歳になると相続可能な貴産相続を拒否したのである。

このように「老熊」の倒れた日以後、アイクの精神を緊張させる事柄が起きている。アイクの精神的発達過程に多大な影響を与え、美德体得だけではなく、南部の歴史とアメリカ大陸という「場」の過去の悪徳と現実の頹廃を見ることのできるように開眼するのである。それは自から背負わねばならない過去の罪業を認識することである。アイクは、

This whole land, the whole South, is cursed, and all of us who

(27) William Faulkner, *Ibid.*, p. 214.

derive from it, whom it ever suckled, white and black both, lie under the curse?⁽²⁷⁾

と南部全体、いやアメリカ大陸全体が呪われている、同時に自分自身を含む、すべてのものが呪われていることに気が付くのである。それはアメリカ大陸が発見され、歴史がはじまった時、「大森林」が象徴化され「過去」のものとなった時から始まっている。「大森林」そのものをアイクは、心の拠り所

This is enough and looked about for one last time, for one time more since He had created them, upon this land this South for which He had dono so much with woods for game and streams for fish and deep rich soil for seed and lush springs to sprout it and long summers to mature it and serene falls to harvest it and short mild winters men and animals,⁽²⁹⁾...

と愛情を持ってみている。この「大森林」としての「場」は、解放と自由の避難所であり、フォークナー自身の心の拠り所にもなっているのである。このようにアイクにとって「大森林」は心の拠り所ではあるが、荒野は祖先の罪業の「場」として呪われていたのである。

荒野における祖先の罪業という「過去」の事実の驚異に圧倒されているアイクではあるが、忍耐強い愛情を持って南部をみているのである。それは道徳的罪に対する罰としてではなく、謙虚さと勇気を持って、自からの精神的発展によって荒野を「大森林」という「過去」の象徴としてみているのである。「大森林」の中で体験したことによる成長から本当の意味の美德体得ができたと悟るのである。これによってアイクは、純粋な精神的発見を遂げたのである。

⁽²⁸⁾ *Ibid.*, p. 273.

⁽²⁹⁾ *Ibid.*, p. 278.

V

フォークナーは、アイクについて「成功は与えられなかった、しかし平静さと知恵という重要なものを与えたのだ。」(They didn't give him success but they gave him something a lot more important, even in this country. They gave him serenity, they gave him what would pass for wisdom.⁽³⁰⁾) とアイクが荒野と人々から学んだものについて述べている。アイクは、一つの真理、一つの運命を学んだのである。フォークナー作品の一つの命題である人間の存在理由についての追求をアイクは、行なっているのである。この追求による人間の苦悩、そしてそれからの解放を示している。

フォークナーの作品に描かれている「過去」という記憶の「場」こそ「熊」に描かれ、象徴化されている「大森林」なのである。それは南部というよりアメリカ大陸の「過去」の姿としての「大森林」にこそ、人間の帰るべき「故郷」がある。心の平静さを取り返す「場」としての「大森林」を侵蝕し、文明化することによって破壊した人間は、「大森林」のすべてを記憶の奥深くに止める以外にはなかつたのである。

文明化によって、汚され、破壊された荒野は、人間の心の底に「大森林」という「過去」の記憶となって残るだけとなった。そして人間が、常に回帰を欲する「場」となったのである。この「過去」から逃れようとすると罪業の深さが増幅して心の中に押し入って報復を加えるのである。

Whole hopeful continent dedicated as a refuge and sanctuary of liberty and freedom from what you called the old world's worthless evening⁽³¹⁾ とフォークナーは、アメリカ大陸を見ているが、「呪われ」、「穢された」

(30) Gwynn & Blotner, *Ibid.*, p. 54.

(31) William Faulkner, *Ibid.*, p. 278.

大陸に変質させる文明化の中で生きなければならない人間は、それでも常に「新しいエデン」を捜し求めるのである。かつて、アメリカ大陸も「新しいエデン」であった。しかし、フロンティアを広げ、文明化しながら侵蝕されることによって、大陸全体が「呪われ」ることになったのである。こうして、人間は帰るべき「故郷」を失い、「大森林」という象徴化によってのみ「故郷」を記憶の中だけに止めたのである。こうして人間すべてが、帰るべき「故郷」としての「場」のない放浪者となったのである。

フォークナーの作品中には、常に存在理由を求めている人物が描かれている。このことは、帰るべき「故郷」を失った人間の定まるべき「場」を求めての苦悩ではあるまいか。現実の「場」のない人間は、「過去」の記憶を支えにして、「新しいエデン」を捜し求めようとしているのである。

「熊」という作品は、フォークナーの全作品の心の拠り所である、と同時に出発点でもある。こうして「大森林」から出た人間は、消滅する世界の中で謙虚さ、忍耐そして勇気を持って美德体得に旅立ったのである。そして「新しいエデン」という「場」を求めて「過去」という記憶の中にすべてを凝縮させて緊張しているのである。